

ペティの『提言』における社会政策論としての実践的教育

菅野 智城

Practical Education as a Social Policy in Petty's *Advice*

Tomoshiro KANNO

(Received on Jan. 31, 2024)

キーワード：ウィリアム・ペティ、『提言』、実践的教育、ものづくり

1. はじめに

紙と活字印刷技術の発明以降、16世紀において印刷本が普及したことは、偶像・儀式の文化から文字・書物の文化への移行を推進させたと言えるだろう。社会史家のローレンス・ストーンが述べているように、偶像破壊の危険性を悟ったカトリックが絵画、ガラス、彫刻で教会を飾り、荘厳な宗教感覚によって民衆を支配しようとしたのに対し、文字・書物文化を保持するプロテスタントは、聖書やプロテスタント改革者の書物を読むことで印刷されたページから神の言葉をを知ることがを強調した(86)。また、経済学者のジョセフ・ケイも、プロテスタントの神髄に求められるのは信徒の教育であり、カトリックが儀式をおこなうことで人間の魂の上に帝国を築きあげるのに対し、考えることをしない無知な者たちをかき立てる儀式のほとんどをプロテスタントは放棄したと述べている(Kay 508-9)。

17世紀中頃のイングランドに目を向けると、説教や印刷物をとおして論争がおこなわれたことがこの時期の国内の識字率上昇に影響を与えたとブリッグズは述べている(214)。当時、内乱期を迎えていたイングランドでは教育改革の機運が高まっていたが、それはピューリタンと呼ばれた人たちの力によるところが大きい。彼らは聖書を読める国民が共和国を支えると考え、無知に対抗するために教育に価値を見出した(ストーン 54)。彼らの熱意は、個人の信仰意識を発達させたという点において一定の役割を果たしたと言える。しかし、経済的に余裕のあるジェントリ層の家庭では、子どもを聖職者、弁護士、医者など社会的地位のある職業に就かせるために家庭教師をつけ、名門校に入学させたが(ストーン 76)、そこでは依然としてリベラル・アーツや古典教育が重視されていた。このように、教育がイングランド国民全体に普及しつつあった一方で、階級間に見られる教育内容の格差が解消されることはなかった。

本稿では、当時の教育改革を牽引した人物および教育パンフレットに焦点を当て、そこで示される教育改革案について考察を加えたい。

2. ハートリブ・サークルと教育パンフレット

17世紀のイングランド国内における教育改革に強い影響力をもった人物として、サミュエル・ハートリブ(Samuel Hartlib, c1600-62)をあげることができる。ハートリブ研究はターンブル(G. H. Turnbull)とウェブスター(Charles Webster)によって本格的にはじまった。ハートリブに関する膨大な量の書簡はシェフィールド大学図書館により *The Hartlib Papers* として編纂され、現在、同大学の the Humanities Research Institute によりデジタル・アーカイブ化されている。

プロイセンに生まれたハートリブは、ポーランド人の父とイングランド人の母をもつ。彼は1628年にイングランドに定住し、1630年頃から知的交流のネットワークとしてハートリブ・サークルを主催した。彼は1631年頃からチェコ

の教育思想家ヨハン・アモス・コメニウス (John Amos Comenius, 1592-1670) と交流している。コメニウスは 1641 年から 1642 年にかけてイングランドを訪れているが、その実現に大きく貢献したのはハートリブであった。また、ハートリブ自身も教育をテーマにしたユートピア論『有名なマカリア王国についての記述』(*A Description of the Famous Kingdom of Macaria*) を 1641 年に発表しているが、自身が主催するサークル内外で交流のある知識人の著作を紹介、出版していることから、彼は後見人あるいはプロモーターとしての顔をもつ。ハートリブは知識の普及活動に力を入れ、当時の社会が教育への要求を強めた状況のなかで、社会政策上の教育改革案として、教育パンフレットの出版を目論んだわけである。

王立協会の前身のひとつに数えられるハートリブ・サークルは、1630 年代から王政復古までの約 30 年間、プロテスタント教会間の和解工作、科学的発見の情報交換、農業改革、教育改革等、幅広い活動を展開している (相馬 38)。そのなかでも特に注目すべきものは情報局構想 (the Office of Address) である。これは、①職業斡旋をおこなう部門と、②情報管理、学問的な情報交換をおこなう部門によって構成され、教育、就職、商工業の様々な情報の収集と分配を可能にするものであった (相馬 55-56)。この情報局構想は、実務教育の普及による貧民層の自立をうながし、最終的には上流階級と下層階級の極端な経済的格差が解消することを目的としている。

ハートリブ・サークルから出版された教育パンフレットの多くは教育改革案としての性格が強い。代表的なものは、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の『教育論』(*Of Education*, 1644)、ウィリアム・ペティ (William Petty, 1623-87) の『提言』(*The Advice of William Petty to Mr. Samuel Hartlib for the Advancement of Some Particular Parts of Learning*, 1647)、ジョン・デュアリ (John Dury, 1596-1680) の『改革された学校』(*The Reformed School*, 1650) である。特にペティの『提言』はハートリブの教育思想に近く、実学重視の実践的教育、職業訓練、貧民救済のための学校構想を展開している。そして彼の教育プランのなかでも興味深いのは、プラグマティズムの傾向をもつ三つの具体的な教育施設的设计であり、それらはものづくり教育を重視している点である。

3. ペティの人物像と評価

ペティは 1623 年 5 月 26 日、イングランド南部ハンプシャーのロムジーという小さな港町に生まれた。ペティの父はロムジーの主な産業である毛織物業を営んでいたが、家計は苦しいものであった。ペティ少年は早熟で頭脳明晰であったようで、地元のグラマー・スクールではギリシア・ラテン語を学んだりもした。1637 年、ペティは商船の水夫となるが、極度の近視であった彼は岩礁を避けるための陸標を見落とし、船長にひどく叱責される。また脚に怪我を負ったことにより、フランスのノルマンディーの海岸で船から降ろされてしまう。このときペティは 14 歳であった。その後、フランス北西部のカーンで交易をして暮らしつつイエズス会のコレージュで学び、1640 年にイングランドに帰国する (McCormick 16、大倉 44)。

ペティの学問への好奇心は旺盛で、イングランド帰国後は水兵として働きながら天文学、数学を学び¹⁾、1643 年にはオランダへ渡り複数の大学で医学、解剖学、数学を修めた。さらに 1645 年にフランスに移ってからは、医学校に通いながらサロンに出入りするようになり、知識人たちと交流した²⁾。1646 年に再び帰国した彼はロンドンに移住し、この時期からハートリブと関わるようになったようである (大倉 45)。1650 年にはオックスフォードで医学博士の学位を取得し、ブレイズノーズ・コレッジで解剖学講座を担当し、翌 1651 年には同コレッジ教授、副学長となり、グresham・コレッジでは音楽教授にもなっている (McCormick 74, 81)。ハートリブはペティを非常に高く評価しており、1647 年 11 月、ロバート・ボイル (Robert Boyle) に宛てた手紙には「24 歳、完璧にフランス語を話す、その他の言語もこなし、算術に優れ、性格と振る舞いもよい」と書いている³⁾。

1652 年以降、ペティはアイルランドに滞在することが多くなり、経済学者としての活動が目立つようになる。彼の経済科学について大倉正雄氏は、精緻で複雑な体系的理論というよりも普遍的で純粋な理論、政策的で実践的な問題の提起がその特徴であるとし、ペティの経済思想を包括的・体系的に理解することの難しさを説きつつも、その学史的な意義を評価している (41-42)。

当時のペティの社会的地位や学問上の経歴を俯瞰してみると、そこには強い上昇志向を見ることが可能で、実際、ペティの立ち回りには批判的な意見も見られる。ウェブスターは「野心と日和見主義が彼の慈善事業の重要な要素である」(39) と述べているし、マルクス (Karl Marx) もペティを「経済学の父」と位置づけながらも、次のように断じている。

ペティは考えは大胆であったが、全く浮薄な一外科軍医であって、クロムウェルの庇護のもとにアイルランドで略奪する一方で、またチャールズ二世にとりいって略奪に必要な従男爵の称号をかちえるのをはばからなかったほどであるから、こういう祖先の姿は、公けに披露するにはてんでふさわしくないのである。(38)

たしかに、ペティの立ち回りには野心的で都合主義的な姿勢を見ることができる。しかしそれは彼自身の幅広い知的関心と交友関係に支えられたものである。大倉氏も言うように、権力者との良好な関係性とペティの性格を問題にする場合には「彼が最高位の科学者にまで上り詰めた、下級階層の出であったということを考慮に入れる」(53) 必要がある。ペティの処世術には批判されるべき要素が多いが、それ以上に彼自身の明晰さに裏づけられた知的関心の広さと、それに対する周囲からの信頼がなければ、彼自身の地位と名誉、そして権力者との良好な人間関係が構築されることは難しかったであろう。

4. ペティの『提言』

ペティの初の著作である『提言』は、ハートリブ・サークルの方針を支持しており、特に世の中に埋もれた才能や技術についての情報共有と、貧民救済としての教育制度の整備を説いている。『提言』の冒頭では、貴重な才能が散在して世間に認知されない状況を戦場にたとえて批判している。

現在の人々の状況は最近戦闘の行なわれた戦場のようで、脚、腕、目玉があちこちに散らばっているのを見ることができ、それらを活気づけ生き返らせるためにつなぎ合わせるものと魂が足りず、カラスのえさとなり空気を汚す以外にない。(Advice 2)

次いで、ハートリブ・サークルが提唱する情報局に賛同し、似たような才能、発明、技術が重複することのないよう、それらの情報を共有することによって無駄や混乱を防ぐことの意義が述べられる。

世界中には多くの知恵や才能が散らばっており、ある人たちはすでに行われていることを行おうとし、すでに発明されたことを再発明しようとして混乱している。他の人たちは、簡単に出せるような少しの指示も与えてもらえず、困難にはまって抜け出せないのを私たちは見る。(Advice 2)

ここでは世に出ていない才能や技術の発見と、その効率的な情報共有の必要性が強調されている。そこでペティは三つの教育施設—“Ergastula Literaria, Literary work-houses”「学問の作業場」(3)、“Gymnasium Mechanicum or Colledge of Tradesmen”「技術の修練場」(7)、“Nosocomium Academicum”「学院」(8) —の構想を打ち出している。貧しいながらも才能のある子どもが学び、技術をみがき、社会の利益創出さらには国家の発展に貢献できる人材が育成されるこれらの施設は、それぞれの意義と目的とが明確に示され、実践的な学びの場として自律的に機能している。

第一の施設 Ergastula Literaria は、将来的に自立して生活するための下地づくりの場である。この施設では7歳より上のすべての子どもが教育を受けることができ、親の貧困や能力を理由に排除されることはない。その教育方針については、読み書きを重視した文字による教育よりも、知覚できる対象や活動の観察をはじめに教えるべきとする実践的な立場をとっている。物事を知る前に読む必要はなく、自分の考えを形にする価値があることを知る前に書く必要もなく、ましてや母国語で十分に事足りる書物がある場合には外国語を学ぶ必要もないことを、ペティはその理由としてあげている。ただし、読み書き教育そのものを排除しているわけではなく、それは一般的な方法と、効率を重視した(道具を用いた)速記⁴⁾とによって行われる。さらに、言葉(文字)では表現できない絵画、算術、幾何学といった学問分野もカリキュラムに組み込まれている(4-5)。このように、特に低年齢層の教育では従来の読み書き中心ではなく、知覚できる対象の観察から得られる体験を中心とする幅広い教養教育が展開されていることは、伝統的な人文主義的な教育が主流であった当時の英国の教育スタイルから見ても斬新であり、新たな視座を与えるものであった。というのも、それまで教育を受ける対象ではなかった貧困層の子どもに職人として自立するための機会を提供し、その技術力を循環させることで社会の利益を創出することが企図されているからである。そのうえで、ものづくりに重点を置き、社会の利益の創出に資するようすぐれた技術力の習得を推奨する理由を、彼は次のように列挙している。

1. 職人にだまされる可能性が少なくなる。
2. 一般的により勤勉になる。
3. 通常の職人を超えようと努力することで、優れた作品（もの）を作る。
4. 自ら実験を行えるので、他人に依頼するよりも少ない費用で慎重に行える。
5. 富裕で能力のある者はすすんで啓発的な実験を行えば、公共の技術が進展する。
6. すぐれた技術者あるいは技術のパトロンになることを保証する。
7. 時間と財産を無駄に浪費する悪い機会から守られる。
8. 繁栄時には大きな装飾となるのと同様に、逆境や災害時には大きな支えとなる。(Advice 6)

これらは、すぐれた技術を身につけ、自ら生計を立て、社会全体の発展に貢献できる人材の育成という理念を支えている。そのためには、これまで一部の上流・中流階級を中心に続く人文主義的・古典主義的な教育の構造から脱却し、社会全体に利益をもたらす教育制度を構築することをペティは目指しているのである。また、ペティの考える学びは無駄という概念がほとんど介在しない合意的なもので、すべてが何らかの利益に通じるよう設計されている。これは人間の内面にも光をあてる人文主義的視点とは本質的に異なるものである。

第二の施設である *Gymnasium Mechanicum* は、各職業の分野においてすぐれた職人がさらに高度な技術を修練する場である。ここでは選ばれた職人が優美な住居に家賃なしで住み、職業技術の向上に励む。この施設に入ることを許されているという信用と、発明・製作した商品の迅速な売買が見込まれることで、その分野における優れた職人たちが仲間になりたいと集まり、さらに新たな発明や有効な機会と手段（人脈）を創出することが期待されている（7）。

マコーミックが指摘しているように、ここでは独創的なスキルがもたらす個人の利益と社会の利益の対立へのディレンマが見られ、三つの施設のうち最も簡潔に書かれているものの、ペティ自身の考える具体的な職人像が提示されていると言える（68）。実際、この施設についての記述では、『提言』の冒頭にあるような貧民救済のための教育というよりも、技術力の向上による利益の創出とそのコミュニティのさらなる拡張に力点が置かれている。このような職人の具体的なイメージは、下層階級の出でありながら、自身の明晰さと行動力と、周囲からの信頼とによって国内外で広い人脈を築き、クロムウェル政権ではアイルランドの土地の測量事業を任せられ、王政復古とともに設立された王立協会の主要メンバーとなったペティ自身の経歴と重ねることができるとも考えられる。

第三の施設である *Nosocomium Academicum* は詳細かつ具体的に記述されているものの、先の二つの施設と比べて実現性に欠けている。この施設では完全な植物園、動物や鳥のための小屋やケージ、外来の魚のための池や温室が設置され、あらゆる学問分野の過去の希少な自然物と人工物のリポジトリ的な場として機能する。精巧に作られた泉と水道、厳選された書物をそろえる図書館、天体と気象のための天文台、さまざまな農業実験のための広大な土地、めずらしい絵画や彫像のギャラリー、完全な説明に基づく美しい地球儀と地図などをそろえた空間は、世界の縮図として設定されている（8）。ペティ自身もこの施設の実現には時間がかかるとして、古い病院を代用して多額の寄付金なしに設立する案を示している（9）。また、その詳細な説明の多くは、病院としての機能を中心に、医者、看護師、薬剤師、数学者、哲学者、技師といった幅広い職種の高い専門性を有する従事者に割かれている。このように、*Nosocomium Academicum* の設計は教育の主題からはいくぶん離れた、実現性が疑わしい高度な研究施設の様相を示している。それは国家の発展に資するに足る先進的な科学技術をそなえたアカデミー構想であると言えるだろう。

Nosocomium Academicum のようなユートピア的空間は、『提言』の趣旨からはやや逸脱しているように思われる。しかしここで忘れてはならないのは、ペティ自身が知的エリートとしての経歴を歩んできたという事実である。ペティが「この施設で暮らす人はたとえ読み書きができなかったとしても、いわゆる歩く図書館（のような人）よりもすぐれた学者になれる」「子どもが読み書きを覚える前にこれらすべての事物に精通していれば、よい書物を容易に理解でき、悪い書物から浅薄な考えを嗅ぎ出せる」（8）と述べる時、学ぶ側の理解力、学習者個人の能力は議論の対象にはされていない。このことは、同じく知的エリートであるミルトンが『教育論』のなかで、すべての学問分野（科目）の習得をギリシア・ローマの古典作品を網羅的に読むことに委ねた姿勢と重なる。ミルトンは代表作 *Paradise Lost* (1667) のなかで、“fit audience ..., though few” 「少ないながらもふさわしい聴衆」(*Paradise Lost* 7:31) という言葉を用いているが、そこには理解力の足りない者は相手にしないという、情報の受け手を選別する知的エリート主義的な姿勢が見え隠れする。このような姿勢は、知覚による観察を優先させて実践的教育スタイルを前面に出しながらも、文字（書物）による教育を理解できて当然のものとして知的学術世界でキャリアを積んでいたペティのそれと反響する。

5. おわりに

ペティの『提言』は、貧民層の救済を目的とすることの教育からはじまり、すぐれた技術者育成による利益の創出、そして（一見すると理想主義的ではあるが）学術的に高度なアカデミー構想へと至っている。彼の教育思想は最終的には国家の発展に向けられているが、それはミルトンが示したような国家の指導者育成というエリート主義的教育論ではなく、国民の才能と技術力向上を国の経済発展に組み込んだものづくり教育論であると言える。そのようなミクロな視点からマクロな視点へと段階的にデザインされた『提言』は、17世紀イングランドにおける新たな教育改革案であると同時に、国民全体の利益創出による国家の発展という主題をあつかう社会政策案として位置づけられるのである。

注

- 1) この時期、ペティは当時イングランド国内で最も著名であった数学者オートレッド (William Oughtered, 1574-1660) と出会っており、それによりアムステルダム大学で教授職に就いていた数学者のペル (John Pell, 161-1685) を訪れることとなった (McCormick 28, 31)。
- 2) 学僧メルセンヌが主催したこのサロンには、パスカル、デカルトをはじめ、イタリアからはガリレオ、イギリスからはペル、ハートリブ、ホブズら「知的潮流の最前線に立っていた人物」が参加していた (大倉 45)。
- 3) “Letter, Hartlib To Robert Boyle,” 16 November 1647, Robert Boyle Correspondence in *The Hartlib papers*, [available at <https://www.dhi.ac.uk/hartlib/browse?menu=additional&filter=BOYLE>].
- 4) 「道具」とはペティ自身が発明した複写器具を意味する。これは安価で、簡単に作成でき、長持ちするとペティは述べているものの詳細な情報が明らかにされず、また実演の結果も怪しいもので、結局パトロンも見つからず実用化には至らなかった。

引用文献

- Greengrass, M., Leslie, M. and Hannon, M. *The Hartlib Papers*. Sheffield: The Digital Humanities Institute, University of Sheffield, 2013. [available at: <https://www.dhi.ac.uk/hartlib>].
- Kay, Joseph. *The social condition and education of the people in England and Europe; shewing the results of the primary schools and of the division of landed property, in foreign countries*. Vol. 2. London: London, Longman, Brown, Green, and Longmans, 1850.
- Fowler, Alastair, editor. *John Milton: Paradise Lost*. 2nd ed., Longman, 1998.
- McCormick, Ted. *William Petty: And the Ambitions of Political Arithmetic*. Oxford University Press, 2009.
- Petty, William. *The Advice of W. P. to Mr. Samuel Hartlib, for the Advancement of some particular Parts of Learning*. London: [s.n.], 1647[1648]. [available at: <https://quod.lib.umich.edu/cgi/t/text/text-idx?c=eebo;idno=A54605.0001.001>].
- Webster, Charles. *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*. Cambridge University Press, 1970.
- 大倉正雄「ウィリアム・ペティと経済科学の曙 (1)」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』第23巻第2号 (2021年)、41-96頁。
- ストーン、ローレンス『エリートの攻防：イギリス教育改革史』佐田玄治訳 御茶の水書房、1985年。
- 相馬伸一『教育思想とデカルト哲学—ハートリブ・サークル 知の連関』ミネルヴァ書房、2001年。
- ブリッグズ、エイザ『イングランド社会史』今井宏・中野春夫・中野香織訳 筑摩書房、2004年。
- マルクス、カール「経済学批判」『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻所収、大内兵衛・細川嘉六監訳 大月書店、1964年。